

講 演

## 危機の時代における慈悲の境界の拡大

オタゴ大学・教授  
 ニュージーランド平和紛争研究センター所長

ケビン・クレメンツ

高村先生、またご来賓の皆様、そして学生の皆様、温かい歓迎をしていただき、心より感謝申し上げます。ニュージーランドは今、春です。この秋の日本に来日することができ、大変に光栄です。

この話を始める前に私どもの先祖にも敬意を表したいと思っています。とりわけ、創価学会の戸田城聖第2代会長、牧口常三郎初代会長、そしてもちろん、創立者であられる池田先生、さらに、平和を推進される多くの創価学会の皆様、心からの敬意を表したいと思っています。

私は、平和構築のプロセスにおける女性の役割について強調したいと思います。今日は、慈悲の政治について話をするわけですが、もともとそういった内容について研究していたのは、フェミニストの学者でした。彼女たちは、思いやりの美といったことについて、いろいろ発言をしてきたわけです。講演を始めるにあたって、T.S. エリオットの『Little Gidding』の詩を、ここでご紹介したいと思います。

我らは探検をやめることなし

すべて我らの探検の終わりは、我らの出発の地に至ること

しかもその地を初めて知るのだ

この詩を解釈するにあたって、2つの解釈があると思います。1つはふるさとに戻るということ。私も長年アメリカに住んでいましたが、ふるさと

ニュージーランドに戻ってはじめて、自分のふるさとについていろんな発見をしています。もう1つの解釈の仕方というのは、自分が子供であったころ、純粋な子供時代を再発見することだと思います。子供というのは、他者に対して非常に心が開かれています。子供というのは、熱意を持って、好奇心を持って、そして人やみくもに判断することなく、他者と積極的にかかわっていきます。

これから20年後、30年後、次の世代を担う皆様が、どういった課題に直面するかということについて、少し一緒に考えていきたいと思います。まず、世界の人口です。世界の人口は今日68億とされています。しかし、2030年には、この人口は90億に増えると言われています。そして、その人口の3分の2は、東京のような大きな都市部に生活することになります。食糧に対する世界の需要も上昇していきます。この食糧の世界的な消費というのは、1980年には15億トンでした。それが2030年には、35億トンにまで増えると言われています。そして、2030年の需要に対応するためには、食糧の生産量を50%増やしていかなければいけないと言われています。金融危機というものが最近ありました。世界の金融システムそのものも、非常によろよろとしております。

そして、人間の生存のために最も必要な消費財というのは新鮮な水（淡水）です。しかし、水はどんどん不足してきています。私がこの世に生まれてから数年後の1950年当時、1人当たり17000リットルの水が供給されておりました。しかし、2030年には4000リットルの水しかない。しかもその半分は農業に使われるようになります。この水不足というのは、すべての大陸で発生すると言われています。そして、エネルギーの使用ですが、こちらも劇的に上昇すると言われています。とりわけ、インド、中国でのエネルギーの利用が高まると言われています。1980年のエネルギー使用は、石油に換算したときに7223トンでした。これが2030年には、17014トンにまで増えると言われています。これは全く持続可能な量ではありません。

そして、地球の温暖化の現象です。もちろん、私は悲観的になるつもりはありません。この地球温暖化にも対応する術というのがあるわけです。しかしながら、国連の気候変動に対する政府間パネルのさまざまな予測というのは、非

常に過小評価されているとか、あるいは予測というのが決して正しくないと  
言えるかもしれません。また、最近の研究によると、海面上昇であるとか、  
氷河の溶解、そして、山火事のリスク、そういったものというのは、2007年に  
発表されていた最悪のシナリオをはるかに越えていると言われていました。ま  
た、今現在、巨大な氷山が、私の住むニュージーランドに向かってどんどん流  
れてきていると言います。南極の海流に乗ってこの氷山が移動しているという  
現象も起きています。また、オーストラリアの南部では、この数週間、毎日40  
度以上という灼熱の気候が続いています。ということは、山火事のリスクが非  
常に高まっているということです。こういったさまざまな問題に対して私たち  
は、世界のすべての資源を動員し、問題解決していかなければなりません。

しかしながら実際には、2007年に、世界で1億3390億ドルに匹敵する軍事の  
ための支出が実施されていました。これは前年同期比で6%増であったと言わ  
れています。そして、1998年からは45%の増大です。これは世界のGDPの  
2.5%に匹敵します。あるいは、世界の1人当たりの支出は202ドルに匹敵す  
ると言われています。しかも、この軍事支出の45%がアメリカによって支出さ  
れているという事実もあります。今まで大変に暗い悲観的な2030年の予測を皆さ  
んにお話ししてきました。2030年には、こういった状況に収斂されるだろうと  
いう予測です。

では、慈悲というのは、そこにどうやって関わってくるのでしょうか。権力  
と政治の論理の中には、支配という要素が非常に大きく関わってきます。しか  
し、皆さんや私たちのほとんどは、そういった支配という論理ではなく、もっ  
と違うレベルの論理によって行動しているのではないかと考えます。それは人  
間関係、つまり共感であったり、利他主義、愛情、そして慈悲、そういった関  
係性によって、私たちは、私たちの人生を営んでいるのではないかと思います。  
このような論理こそ、私たちが時代を経て生存することが可能になった論  
理ではないかと考えます。世界中、いろいろな大学を見まわしたときに、共感  
であるとか、愛情であるとか、慈悲とか寛容、そういった内容を授業の中で教  
えている大学がほとんど存在しないというのは、非常に驚くべきことだと思  
います。物理だとか、数学だとか、歴史だとか、社会学とか、そういったことは

教えるのに、私たちの人生を生きていくために必要な、今申し上げたようなそういう論理といったものが一切教えられていないというのは、非常に不思議だと思います。もちろん、創価大学については、それは当てはまらないかもしれません。

この世の終わり、いわゆる終末思想の4つの大きな災厄と言われている征服、戦争、飢餓、死、そういったものは、支配の論理から生まれます。これこそが、私たちが21世紀にどうしても管理しなければいけない4点だと思います。この支配の論理に対して、私たちは慈悲の論理をもって対抗していかなければなりません。慈悲の論理こそが、私たちの存続を可能にする共同体を作り出すのです。

私はある時、エリス・ポールディング博士と一緒に、兵器のない世界を作ろうというプロジェクトに参加したことがありました。それは、いわゆる本当に慈悲に基づいた共同体、人々が音楽だとか、それぞれが笑顔で笑い合って、心から互いを尊敬し合う、そして敬意を払う、そういうような社会、共同体を作る、そういう世界を作るにはどうしたらいいかというプロジェクトで、それをエリス・ポールディング博士と一緒に推進したことがあります。私たちの中には、もともと人とつながっていきたい、人と何らかの関係性を持ちたいという意思が組み込まれていると確信しています。決して自分だけが個人主義で、全く人とかかわらないような人間として、もともとこの世に生まれてくるものではないと確信しています。

近年、神経科学であるとか、あるいはミラーエモーションと呼ばれている心理学の分野で研究が進んできました。シカゴのジンエテカティとかオタゴの私の同僚であるビッツフランスといった学者が研究したところ、私たちの脳には共感であるとか、社会的な存在でありたいとか、あるいは他者の苦悩のニーズに何とか対応したいという気持ち、意思というのが、もともと生まれたときから組み込まれているということが発見されつつあります。私たちの脳は、ほ乳類の中で最もサイズが大きい脳です。そして、その脳の中には孤立した個人主義ではなく、人ときずなを結びたい、共同体と関わっていききたいというニーズが組み込まれているのです。そして、そういった絆を通して、社会的に認識さ

りたい。あるいは自分たちの繁栄や安寧、そして安心というものを確保したいというニーズがあるわけです。それは信頼に則った人間関係から可能になるものです。政治、あるいは教育、教育学の哲学、そして経済学、ネオリベラリズムなどの学問の分野でも、やはりこの極端な個人主義というのは、一種の社会的な病理であるということが最近では言われるようになりました。

私が先ほど述べた暗い世界の状況、そういった課題に人類が対応し、そして抵抗していくのであれば、私たち人類は絶滅危惧種となりうることを理解し、共同体あるいは慈悲の境界の拡大ということを強調していかなければなりません。では、どうやって私たちは、この慈悲という論理を拡大することができるのでしょうか。少し哲学的な話になりますが、私たちは家族、親族、あるいはいろいろなグループに自分たちが帰属し、人間関係があるんだということをきちんと理解して、そこへ立ち返って、慈悲に基づいた利他主義あるいは寛容の能力といったものを育成していかなければなりません。つまり、自分たちの中にある愛であるとか慈悲といった気持ちの淵源を理解し、そして、それを育成し拡大していくことが大事なわけです。そういった意味では、やはり家庭というのが、この平和構築のプロセスを私たちが始める一番最初の起点になるわけです。しかし、家庭、ホーム、ふるさとのような考え方というのは、決して外国人の排斥や極端なナショナリズム、愛国心といったものと混同されてはいけません。

2つめの慈悲の拡大のやり方ですが、エマニュエル・レヴィナスが言うように、他者に対してオープンであるということです。健全な自分自身に対するアイデンティティというのは、やはり他者に対して開放的である、オープンであることから始まると思います。女性は、やはり自分の安心できる場所というのは、人間関係がきちっとある場所だということを理解しています。しかし男性は、むしろ個人主義によって、権力、あるいは自分の能力を増大させることこそが安心できるのだと勘違いしているわけです。そして、エマニュエル・レヴィナスは、『全体性と無限』という著書の中で、私たちは愛という知恵を指針にするべきである。それは、知恵を愛することとは違うのだと述べています。私たちは他者に対して、自分自身がこのように他人に扱われたいというような

行動を取るべきだとレヴィナスは述べています。これは、つまり知恵というのは、他者に対してオープンであるということから発展するわけです。そして、そのオープンであるというところから、私たちは倫理的な自分自身の義務といったものを発見していくわけです。アルベルト・シュバイツァーが、生命への畏敬というふうに呼んでいた考え方ではないかと思います。つまり、他者をあたかも神聖な場所として扱うということです。

そして私たちは、他者に向かうときに、共通の脆弱性、弱さがお互いにあるんだということを理解するところから、他者との関わりに取り組むべきだと思います。私たちは、それぞれさまざまな国に生まれ、病気、不幸といったものを経験します。他者のそういった状況を理解することこそが、私たちが他者と正しいつながり方をすることができ、そして、他者に対する自分自身の姿勢というものをソフトにすることができるのではないかと考えます。アメリカの思想家であるジュディス・バトラーは、『生のあやうさ—哀悼と暴力の政治学』という本の中で、私たちは、顔を持たないものたち、私たちににとってその顔が悪の象徴としか呈示されないものたちの生に鈍感となり、その生の損失を悲しむことを無限に先延ばしにする、と述べています。また私たちすべてが異なる仕方、自分を認めさせるために戦っていることを、私たちの共同体そのものが私たちに理解させていると。つまり、これは何を意味しているのかと言うと、私たちには共通の弱さ、脆弱性があるということです。つまり、それが、私たちの共通の人間としての在り方であるというのです。

私はニュージーランド出身になりますが、ニュージーランドのマオリ族は、鼻と鼻をこすり合わせるホンギというあいさつの仕方をします。これが意味しているのは、お互いの魂、お互いの心、そして、お互いの息遣いを共有しようということです。それを他者と共有することによって、あいさつをする、相手を認める。そういうあいさつですが、これはつまり他者、そして自分のそうした弱さ、脆弱性といったものを共有するというプロセスでもあります。他者というのは、同じ空気を吸って生きています。また同じ空間で生活をしているわけです。従って、こういった出会いを通して、私たちはその人間としての共通項といったものを共有するということなのだと思います。私が今まで話してき

た内容を聞いて、何かこの愛とか善意の哲学というのは、非常にソフトだけでも、何かちょっとなよなよしてると感じられるかもしれませんが、決してそういうことではありません。やはり哲学というのは、正義と愛情といったバックボーンを持っていなければいけないのです。

そして、慈悲は2つの方法で発揮されます。たとえば慈悲は、自発的な個人の行為として発揮される場合があります。あるいは他者のニーズにどのように自分が対応していくのかといったところから発せられる場合もあります。そして、もう一方で制度的な慈悲というのものもあるかと思います。つまり、組織であるとかそういった制度、あるいは共同体が大義を認め、そして他者に、とりわけ知らない他人に対して歓迎の気持ちを表す、包含する、相互関係を結ぶ、寛容の精神を実践するという、それが制度的な慈悲だと考えます。だいぶ若くして亡くなったシモーヌ・ヴェイユは、次のように言っています。正義は権利であるとか義務とか、そのような抽象的な概念の下で機能している。しかし慈悲は、より深い問題というか、敬意、なぜ私は傷つくのかといった定義に対して反応していると述べています。この問題こそが、私たちにとって大きな課題であり、それは真実であるとか、正義であるとか、愛情といったものに基づいた対応を求めているのです。

4つ目の慈悲の拡大の方法です。それは感情というものをより中心に持ってくるということです。政治哲学の中においては、合理性、あるいは最大化、そういったことが強調されがちです。つまり、私たちは、問題を解決する、あるいは問題に直面したときに、合理的かつ論理的に問題に対処すると言われていきます。しかし、その論理、その合理性とともに、私たちの意思決定はしばしば感情によって支配されているのです。経済、社会、政治的な分野で、感情が関係ないということを言う人がもしいたのであれば、次のような質問をしてみたらどうでしょうか。たとえば、自分だけが仲間はずれにされたら、他者に拒絶されたら、どのように感じますかと。自分だけがパーティに招待されなかった。自分だけが仲間に入れてもらえなかった。そういった場面に直面したときに、じゃあ、どのように自分が感じるのかということ、自問自答してほしいと思います。

北朝鮮の金正日総書記がいます。彼があのような態度を取っているのは、他に注目してほしいからです。つまりこの感情論というのは、政治の世界でも通用しているわけです。やはり、女性の作家、キャロル・キリガン、マーサ・ナスボーム、ジュディス・バトラー、そして今日、この講演に同席頂いているサーラ・ワイダー教授も、このいわゆる感情というところに大きく着目していらっしゃいます。私の師匠であるアダム・カール教授は、ブラッドフォード大学の最初の平和学者でした。カール先生は、私たちがこの平和の問題を少しでも先に進めたいのであれば、まず最初に自分の心の中にある握り拳を開く必要があると述べています。つまり、これは何を意味しているのかというと、自分のことを他者にすべてさらけ出す、自分の本来の姿を他者に理解してもらうということ、そして他者のことも、他者を本来の他者の姿で理解をするということ、そのことが大事だという意味です。そこで、レヴィナスは次のように言っています。他者は、その他者性、他者であるところの性質を私たちに見せている。それは何も自分を否定することではないんだと。それは穏やかさの原始的な現象であると述べています。つまり、それは共通の脆弱性を認めることであり、その認めるという行為ができて初めて、信頼に基づいた人間関係、あるいは関係性といったものが構築できるということなのです。

そして、5つめの慈悲の拡大の方法ですが、慈悲の主流化ということですから、その政治制度の中で、あるいはいろいろな研究プロジェクトの中で、慈悲というものを主流にしていくということです。それは慈悲に基づく政治を、国家であるとか、地域であるとか、グローバルな組織の政治の側面の中に取り込むということです。それは、政治家が慈悲に則った対話をするということです。しかもそうすることによって、弱いとかソフトだと見られずに、慈悲を主流にしていくことが重要です。池田会長もソフトパワーについて、何年前かに述べられていたと思います。20世紀において、福祉国家というものが、最も重要なこの慈悲を正統的に体現したものであったと私は考えます。では、同じような制度というものを、この私どもが直面するさまざまな課題に対応するために、21世紀にはどのように確立することができるのでしょうか。

最後に、慈悲の問題に関係する「スロー」という言葉の重要性を強調したい

と思います。先ほどご紹介したシモーヌ・ヴェイユですが、彼女は他者との関係において、逡巡する、躊躇する、そういう間を大事にすることの重要性を指摘しています。つまり慈悲を拡大するためには、私たちの経済、社会、政治的なプロセスをゆっくりとする、スローダウンする必要があります。慈悲を実践する時間的な余裕が必要なのです。スローは、いろんな分野で最近になって強調されてきています。ファーストフードよりもスローフードのほうがおいしいと思う人が出てきています。それからセックスについても、早いよりもスローセックス、ゆっくりとしたセックスのほうがはるかに気持ちいいということだそうです。慈悲について考える上でも、スローであることが非常に重要であるわけです。

ジェートアリーとC・トプソンの2人が、ある実験を行いました。それは『エルサレムからエリコへ』という題名のついた実験でした。その実験についてご紹介したいと思います。これはプリンストン大学の神学部で実践された実験になります。神学部の神学生を対象にした実験でした。これはある1人の被害者の役をする人を基にして、その人が庭園の庭の、神学生がちょうど通る道のところに、気分が悪くなって倒れているという設定になっています。生徒を幾つかのグループに分けました。1つのグループの学生には、良きサマリア人のことを勉強して、それについてレポートを書き、それを発表しなさいというふうにします。良きサマリア人というのは、倒れている病人を助けるという内容なんです。もう1つのグループの神学生には、神学部を卒業したあとどこでどこに就職ができるのか、その就職の可能性についてレポートをまとめなさいと指示しました。そこで、良きサマリア人についてレポートをまとめるように指示されていた神学生たちは、そのレポートをまとめて授業に行く間に倒れている人を助けた学生の割合がかなり多かったとのことでした。

それから、その学生たちを3つのグループに分けました。3分の1の学生には、授業に行くのにちょうど時間通り間に合うと言いました。別の3分の1のグループには、あなたたちは授業に遅れていると言いました。もう一つのグループには、十分に時間の余裕があると言いました。そのようないろいろな条件を付けて実験をしたのですが、授業に向かう間に倒れている人を助けた割合

は、時間通りの学生の中で40%で、遅れていると言われた学生たちは10%しか人助けをしませんでした。そして、時間の余裕が十分にあると言われたグループは65%が倒れている人を助けたという実験結果でした。この実験を通して私たちが学んだのは、日本のような社会、あるいは欧米の社会といった、私たち先進国の人々は、常に締切とか時間厳守に追い詰められて暮らしているということです。つまり、慈悲を実践する時間的余裕がなかなかないということなんです。ということは、慈悲を実践するのも、平和的になるにも、あるいは勇氣を実践するにも、私たちは、その時間を作り出す必要があるのです。

最後に私の友人のコール・レララックという人のポケットマントラの一節を紹介したいと思います。このポケットマントラに、彼は道徳的な想像力について次のような一節を書いています。自分は恐れる人に手を差し伸べよう。複雑な心に触れよう。目で見える視覚ですね。目に見えるものの先を想像しよう。そして、もろさ、脆弱性といったものには1歩ずつ進んでいきなさい。そのようなことを書いています。私たちがこういった心を持って、他者に愛情の気持ちで接することができるのであれば、また他者に心を開いていくことができるのであれば、私たちは寛容と平和と相互関係といったものを築いていくことができます。そうすれば、この私たちのさまざまな課題に直面している21世紀においても、平和というものを間違いなく実現することができると思います。もし、それができないのであれば、先ほど、終末、世の終わりの4つの災厄をご紹介したと思いますが、そういった事態に私たちは陥ってしまうと考えます。私はそういった死のような悲観的な結末よりは、やはり愛情に基づいた人生をぜひ送っていきたいと念願しています。